様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 1 日現在

機関番号：32677
研究種目：基盤研究（Ｂ）海外
研究期間：2009～2011
課題番号：21402041
研究課題名（和文）　教員のコンピテンシーリスト開発と成長モデルの構築に関する国際協同研究
研究課題名（英文）　An International Collaborative Study of Competency Model Development and Developmental Model Building for School Teachers

研究代表者
武田　信子（TAKEDA NOBUKO）
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：00247123

研究成果の概要（和文）：
1)　オランダや欧州教師教育学会研究開発センター等の教師教育者の協力を得て，教員に求められるコンピテンシー要素の包括的リストを開発した。
2)　教員のコンピテンシー育成のためのワークショップのプログラムを開発し，新しい教師教育のスタイルを構想した。
3)　開発したプログラムを複数の学校現場で実施し，教育現場にこれまでとは異なる視点を紹介して啓発を試みた。さらに，これらのプログラムの成果を分析し，今後の課題を明らかにした。
4)　教員研修・教員養成用ワークブックを編纂した(「教員のためのリフレクション・ワークブック」)。
5)　教師教育学研究会を組織し，ウェブサイトを開設して，研究成果を公開した。
研究成果の概要（英文）：
1) Developed a comprehensive list of competency elements required for school teachers with the cooperation of teacher educators from the Netherlands and Research and Development Centers of Association for Teacher Education in Europe.
2) Developed several workshop programs for the competency building of teachers, and formulated a new style of teacher education.
3) Conducted practical implementation of the newly developed programs in several schools in Japan in order to introduce and permeate a different perspective to the educational field; and analyzed the outcome for the indication of potential challenges.
4) Edited a workbook for initial and in-service teacher training (“Reflection Workbook for Teachers”).
5) Founded the Research Group for Teacher Education and published in its website the products of the study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
21 年度	7,400,000	2,220,000	9,620,000
22 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
23 年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
総　計	15,400,000	4,620,000	20,020,000

研究分野：社会科学 A
科研費の分科・細目：教育学
キーワード：(1)　教師教育　(2) コンピテンシー　(3) 成長モデル　(4) ワークショップ　(5) リフレクション　(6) 教師教育者　(7) オランダ　(8) ヨーロッパ教師教育学会

1．研究開始当初の背景

マクレランド(1973)の提唱した“Testing for Competence Rather Than Intelligence”を契機とするコンピテンシー研究に基づく専門職の教育・研修は世界各国に広がっている（スペンサー＆スペンサー コンピテンシー・マネジメントの展開，生産性出版，2001）。コンピテンシーとは，卓越した実践力を峻別する行動特性のことであり，日本においても，企業内の人事開発はもとより，たとえば医療・看護などの専門的分野においてコンピテンシーに基づく養成・研修が導入され(日本医学教育学会能力教育 WG，日本看護学教育学会 2008 年度大会，日本社会福祉実践理論学会 WG 等)，成果を上げつつある。しかし，国際的・学術的な広がりを見せているコンピテンシーの概念が，日本の教員養成・研修にはほとんど認知されておらず，特定分野の教員評価にコンピテンシー指標を取り入れている研究が科研費研究に 2-3 ある程度である。また，コンピテンシー概念の特徴（具体的行動指標であること，一つ一つのコンピテンシー項目に具体的開発可能性や基準が示されることなど）が従来の日本の評価観では理解されにくく，単なる一元的な「能力」と誤訳・誤解されたり，上位者からの一方的評価指標と混同されたりするなど，概念の適切な理解が浸透せずに，活用されていない。しかし，2006 年の中教審答申では「単に査定のための評価ではなく，一人ひとりの能力や業績を適正に評価し，教員に意欲と自信を持たせ，育てていく評価とする…評価要素や項目の基準を明確にすることも大切」と指摘されており，また，まもなく始まる教職実践演習や教員免許更新制の導入に伴い，大学で養成・研修する教員の質保証のための確実な養成・研修プログラムと明確な評価基準の確立が求められている。

ところが実際のところ，日本の教員養成・研修は，その最終目標が明確でなく，学習効果に対する指標もないため，養成・研修担当者も教員志望者・教員もあいまいな教授・学習を重ね，取得単位や学習時間，経験年数や役職，業績等によって漠然とした全体評価をする他ないのが現状である。また，授業研究は盛んであるが，生徒や同僚，保護者や学外関係者とのコミュニケーション能力，指導・交渉能力や技術や態度が具体的に問われることはあまりなく，長年対応がなされずにきて，現場での実践上の課題となっている。それにもかかわらず，現在開発されている教員スタンダードの多くは，既にユニセフや OECD の調査で教育政策としては行き詰まりを指摘されている英米独をモデルにして(2008，日本教師教育学会年報第 17 号特集 教師教育改革の国際的動向等)にして，獲得達成目標としての教員の能力要素を挙げてチェックする形，つまり「…できる」というパターンの能力評価を構想しており，これらの要求を満たすものではない。また 行政の指標による人事評価についても，例えば高谷(2008，教員評価の実態と今日的問題の特質，日本教師教育学会年報)が，先行的な都府県の調査で評価方法の妥当性や効果が教職員から肯定的に受け止められていない現状を指摘するなど，評価指標の作成が困難な状況である。

そのような中で，研究代表者は，ここ 10 年近く，カナダやオランダでコンピテンシーに基づく専門職の養成・研修の実際と効果に触れ，それらを日本に紹介しつつ，2005 年度より，専門性が曖昧であった子育て支援者のコンピテンシーリストの開発とそれに基づくワークショップ研修を全国各地で開催してきており，その実績に基づいて，2009 年度に厚生労働省外郭団体こども未来財団が全国で実施する全ての子育て支援対象研修で配布されるテキストの執筆を行うなど，確実な成果をあげてきた。

このような専門職養成・研修の経験と，本研究分担者・協力者らの教員養成・研修現場の豊富で幅広い経験，国際的なネットワークを踏まえて，本研究では，協力国における教員のコンピテンシー研究者や教員養成・研修の研究者，日本の学校現場教員グループなどとも協同して，実践的なコンピテンシーリストと教員の成長モデルを開発し，それを用いた研修の成果を，各国の実践と比較研究しながら検証しようとした。

【本研究の特色と意義】

教師の資質や評価の問題の議論は，これまで教育政策の分析や問題点の追究が主であった。また，教員養成大学を中心に，養成すべき教師像を能力レベルで細分化した到達目標としてのスタンダード作りが盛んだが，それらは大学でも学校現場でも有効に活用されているとは言い難い。新自由主義的な政策がグローバルに広がる今日，教育実践の成果に関する評価やそれに責任を負う教師の評価が，短期的・数値的なデータで説明される状況が拡大しているが，そうした流れに同調せず，教師の向上意欲を高める診断評価・成長モデルを構築する。

(1) 多元的視点からの開発　リストの作成プロセスに，学校教育に先進性とその効果が認められている国々の事例から学べる内容，学校現場の優秀な現職教員の行動分析，さらに民間企業等の人材開発アプローチをとりいれ，多彩な教育関係者と協同する。

(2) 自己診断のリストによる診断と研修の連続性　第三者が知識や能力を判定する尺度ではなく，「…している」という現状を自分で，或いは同僚や生徒たちと共に分析・診断するチェックリスト(オランダで開発され全国で実施されているモデル)を想定し，教師が自身の課題を自己診断できるものを目指す。
(3) 現場から出てくる具体的な基準 教師へのヒアリングを重視し“下からの”基準作りを採用する。この手法の採用によって，具体的・実践的な自己啓発型の行動指標を開発する。
(4) 教師の成長モデルの明確化により，学校開発を図る成長モデルを,学校関係者が共有し,互いの課題を把握しつつ協働することにより,総合的な学校開発が可能となり，現場における関係性の改善や教育体制の整備に寄与することができるだろう。
(5) 国内外の研究者や教師たちとの連携 日本の学校教育が隘路に入っている状況を踏まえ,世界を見渡して，生徒たちが学ぶ喜びや幸せを実感しつつ，学力も確実につけている国々に範を求め，それらの国の教育と日本の教育を比較分析しながら，日本において実現可能な養成・研修のモデルを模索し，提案する。各国が更にそれぞれの国に相応しい養成・研修に取り組んでいくための協力関係を結び，より広い視点から得られる新しい教育に関する研究成果を現場に還元する。

2. 研究の目的
(1)　世界各国の教師教育者の協力を得て,学校教育における教師に求められるコンピテンシーのモデルを開発することである。諸外国との協同体制の下,日本国内の現場教員と協働し開発する。
(2)　コンピテンシーの育成のため上記各国の具体的事例を参照しながら,日本の学校教育の現状に適用できるように,教員の成長モデルを作成し,ワークショップのプログラムを開発して,新しい教員養成・研修のスタイルを構想する。
(3)　開発されたプログラムについて,各国協力研究者とともに多角的な視点から検討・意見交換し,成果を国内研究者や現場教員に報告して啓発・浸透を図る。
3. 研究の方法
(1)　研究計画の確認と研究手法･役割分担の確認・研究の調整
①　研究会議→研究代表者・分担研究者・連携研究者・研究協力者が集まる研究ミーティング
②　海外および国内の研究協力者との研究計画の協議・調整→電子メール等での連絡調整・海外訪問・日本招聘などによる打ち合わせ会議の実施
(2) 海外の研究協力機関におけるコンピテンシー開発やワークショップの実施状況の訪問取材や教師教育者へのヒアリング
(3)　国内外のシンポジウム,講演会,ワークショップ等の開催とそこでの実践・討議結果の分析検討
(4)　国内外の教員や教育委員会へのヒアリング・アンケート
(5)　学校現場におけるワークショップの試験的実施
(6)　各種調査や実践に関する報告会やラウンドテーブル等を開催して,参加者による討議を重ね,結果を分析検討

4. 研究成果(具体的内容については、多岐にわたるため、発表論文や教師教育学研究会 HP 参照)
[21 年度]
(1)8 月：オランダ視察：コンピテンシーモデル開発に関してモデルケースとなっているオランダの動向について,研究代表者,分担者を中心としたメンバーで視察を行い,コンピテンシーモデルを開発した Jansma 氏への聞き取りや,欧州教師教育学会のリーダーSwennenn 氏等へのヒアリングを行う。実際の運用現場である学校等も訪問し,コンピテンシーモデルのあり方について包括的な視野での情報を得た。
(2)8 月：欧州における教員の専門性,教師教育の動向についての現状を把握すべく,欧州教師教育学会(スペイン)に参加し,教師教育に携わる研究者と情報交換を行い,今後の協同研究に向けての協議を行った。
(3)9 月：スウェーデンの教師教育システムの改革について現地調査。
　これらの３連の調査結果を,武蔵大学総合研究所紀要第 19 号に報告。欧州の教師教育に関する近年の情報が日本に初めて届けられ、比較考察された。
(4) 現職教員へのヒアリング：学校現場における教員養成・研修のとらえ方について。→論文発表
(5)22 年 2 月:アムステルダム自由大学講師 Wim Westerman 氏及び「教員の資質に関する協会」アドバイザーFrank Jansma 氏の両名と,大田堯氏,有馬朗人氏,玉井康之氏を招き,日本教師教育学会及び日蘭学会の後援を得て,「教育再考」をテーマに２日間の国際シンポジウムを開催（教育関係者延べ数十名参加）。資料集を作成。
(6) 招聘研究者によるワークショップの実施
教職課程履修学生等を対象にワークショップを実施し,今後の日本の教育現場における教員研修,養成の具体的な方法について検討。

[22 年度]
(1)4 月～8 月 「教師教育学」をテキストとした公開研究会を実施し,教師教育学の日本における実践に関する討議を行う。これに基づき招聘計画を立案。
(2)教員の成長モデル作成のための国内外現職教員アンケート調査実施・集計(オランダ調査を含む)した。学会報告。
(3)9 月,F.Korthagen 氏を招聘。日本教師教育学会第 20 回大会において講演会を実施,100 名程度の学会員参加。また教員養成ワークショップ及び教員研修ワークショップを開催。
(4)12 月,武蔵大学に於いて鈴木寛文部副大臣のご参加を得てリアル熟議「教師教育について語ろう～これからの教師教育について」を開催した。
(5)1 月,副大臣の推薦により文部科学省において,教師教育の関連部局職員数名に対しレクチャー「教員養成の在り方に関する勉強会」(武田信子,矢野博之,横須賀聡子) を実施し、意見交換を行った。
[23 年度]
(1)教員研修ワークショップの実施
高萩市の校内研修,三鷹市のコミュニティスクール委員会,東京都教育委員会教員研修において,オランダ,カナダ等のワークショップ手法を援用した研修とそれに関するアンケートを実施し,成果をそれぞれ論文にまとめた。
(2)コンピテンシーモデルの検討:海外 (オランダ、カナダ) のコンピテンシーリストと国内のスタンダードリスト (国内の大学等の教育実践演習用リストや教育委員会作成のリスト,文部科学省のリスト等) と試作したコンピテンシーモデルを比較検討して,コンピテンシーモデルをバージョンアップし,上記のワークショップと合わせてリフレクション・ワークブックを作成した。
(3)8 月,オランダの教師教育学者コルトハーヘン氏の日本人教師教育者に向けた 4 日間のワークショップをユトレヒトにおいて開催し,日本から 9 名が参加。9 月に成果報告会を実施した。出版企画中。
(4)オランダにおける教師教育について,教師教育者 Anja Swennen 氏,Frank Jansma 氏,Wim Westerman 氏,現役学校教員 2 名に追加ヒアリング。
(5)教師教育学の歴史・現状と本研究の特徴に関する包括的な検討を行った。
(6)国内教育委員会等ヒアリング
各都道府県教育委員会が求める教員の資質について情報収集し,注目すべき地方自治体教育委員会(熊本県,福井県など)でヒアリング実施。
(7)研究会の HP を作成し,3 年間の研究成果を掲載。成果に基づく最終報告会(武蔵大学)を 3 月に開催。
本研究によって、日本の教師教育のあり方について議論するための様々な材料が紹介され、日本全国及び欧州の教師教育者の関心を引き起こした。教師教育学研究会を中心に、引き続き教師教育の新しいあり方を考える動きが継続している。

5. 主な発表論文等
(代表的な論文等は教師教育学研究会 HP にて公開している)
〔雑誌論文〕(計 5 件)
① 武田信子 学校コミュニティの風土を変える試みー三鷹市おおさわ学園コミュニティスクール委員会へのコンサルテーション,武蔵大学教職課程研究年報第 26 号,査読無,2012,31－39
② 武田信子,横須賀聡子,坂田哲人,主体的な学校教員を育成する教員研修プログラムの開発と評価の試みー高萩市における取組事例から,武蔵大学総合研究所紀要第 21 号 査読無,2012,1－21
③ 武田信子,横須賀聡子,坂田哲人,中田正弘,山辺恵理子 オランダと日本の教師教育の比較及び検討 武蔵大学総合研究所紀要第 20 号 査読無 2011 1－30
④ 武田信子,中田正弘,坂田哲人,伏木久始,ヨーロッパの教育事情と教師教育の動向 武蔵大学総合研究所紀要第 19 号 査読無 2010,31－46
⑤ 武田信子,現場教員の語る教員養成と研修の課題,武蔵大学教職課程研究年報第 24 号 査読無,2010,19－27

〔学会発表〕(計 10 件)
① 武田信子,齋藤真宏,矢野博之,坂田哲人,上條晴夫 ラウンドテーブル:学生の省察を教師教育者がどう支えるか?ー省察の進まない学生の事例へのリアリスティックアプローチ,全国私立大学教職課程研究連絡協議会第 32 回研究大会,2012 年 5 月 20 日九州産業大学
② 武田信子,坪井節子,山野則子 教育シンポジウム:教育をめぐるマルトリートメント,日本虐待防止学会第 17 回学術集会いばらき大会,2011 年 12 月 3 日,つくば国際会議場
③ 坂田哲人,山辺恵理子,矢野博之,教師教育者の役割と専門性開発,日本教師教育学会第 21 回研究大会,2011 年 9 月 18 日,福井大学教育地域科学部

④ 武田信子,教員研修のテーマに関する研究,日本教師教育学会第21回研究大会,2011年9月18日,福井大学教育地域科学部,
⑤ 武田信子,矢野博之,中田正弘,坂田哲人,木内剛,横須賀聡子,ラウンドテーブル：教師教育を担うのは誰か（２）～日本教育学会での議論を踏まえて,日本教師教育学会第21回研究大会,2011年9月18日福井大学教育地域科学部
⑥ 武田信子,中田正弘,高旗浩志,矢野博之,ラウンドテーブル：教師教育を担うのは誰か？～教師教育者の専門性を考える,日本教育学会第70回大会,2011.8.24.　千葉大学
⑦ 中田正弘　リアリスティックな学びのための教育実習リフレクションの試み　日本教育学会第20回大会　2010年9月26日
⑧ Fred Korthagen(演者) 武田信子(司会)講演：省察を可能にする教師教育のリアリスティックアプローチ　日本教師教育学会第20回大会　2010年9月26日　日本大学
⑨ 武田信子,坂田哲人,中田正弘 安達仁美他２名　教員による教員のための評価・研修システム開発の必要性(1)(2)　日本教師教育学会第19回研究大会　2009年10月2日　弘前大学
⑩ 伏木久始,武田信子,坂田哲人　ラウンドテーブル：教職の専門性における教員のコンピテンシーを考える　日本教育方法学会　2009年9月27日　香川大学

〔図書〕(計2件)
① 坂田哲人,武田信子　他　岩田康之・三石初雄編,東京学芸大学出版会,現代の教育改革と教師－これからの教師教育研究のために,2011　p46-63　p183-201
② フレット・コルトハーヘン著　武田信子監訳　山辺恵理子,今泉友里,鈴木悠太訳「教師教育学」　理論と実践をつなぐリアリスティックアプローチ　学文社　2010　336p　Linking Theory and Practice The Pedagogy of Realistic Teacher Education)

[産業財産権]
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
http://teachereducation-jp.org/

6. 研究組織
(1)研究代表者
武田　信子（TAKEDA NOBUKO）
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：00247123

(2)研究分担者
中田　正弘（NAKADA MASAHIRO）
帝京大学・教職大学院・准教授
研究者番号：20527435　(H21-23)
矢野　博之（YANO HIROYUKI）
大妻女子大学・家政学部・准教授
研究者番号：40365052　(H23)
西川　正（NISHIKAWA TADASHI）
恵泉女学園大学・人間社会学部・特任准教授　研究者番号：20615158　(H23)
久保　健太(KUBO KENTA)
武蔵大学総合研究所・研究員
研究者番号：20599120　(H23)
伏木　久始(HUSEGI HISASHI)
信州大学・教育学部・准教授
研究者番号：00362088　(H21-22)

(3)連携研究者
坂田　哲人(SAKATA TETSUHITO)
青山学院大学・情報科学研究センター・助手　研究者番号：70571884
(H21-22 研究分担者　H23 連携研究者)
木内　剛(KIUCHI GO)
成蹊大学・文学部・教授
研究者番号：80234178　(H23)
高旗　浩志(TAKAHATA HIROSHI)
岡山大学・教師教育開発センター・准教授
研究者番号：20284135　(H23)
高山　静子(TAKAYAMA SIZUKO)
浜松学院大学・現代コミュニケーション学部・准教授
研究者番号:50509411(H21, H23)
佐藤　仁(SATO HITOSHI)
福岡大学・人文学部教育・臨床心理学科・講師　研究者番号：30432071　(H23)
安達仁美(ADACHI HITOMI)
信州大学・教育学部・助教
研究者番号：30506712　(H21)
鎌田和宏(KAMATA KAZUHIRO)
帝京大学・文学部・講師
研究者番号：00515645　(H21)
和井田　清司(WAIDA SEIJI)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：50345542　(H21)

(4)研究協力者(下記他国内外研究協力者多数)
Wim Westerman　アムステルダム自由大学・講師・フェルゼン副市長
Frank Jansma 教員の資質のための協会・上

級アドバイザー
Fred Korthagen
ユトレヒト大学・名誉教授
Anja Swennen
アムステルダム自由大学・教授
山辺　恵理子(YAMABE ERIKO)
日本学術振興会・特別研究員　(H22-23)
横須賀　聡子(YOKOSUKA SATOKO)
水戸こどもの劇場・副代表　(H21-23)
今井豊彦(IMAI TOYOHIKO)
日本保育協会・研修担当　(H22-23)
築地　律(TSUKIJI RITSU)
三鷹市星と森と絵本の家・館長　(H23)
赤嶺　陽子（AMAMINE YOKO）沖縄キリスト
教短期大学・保育科・准教授　　(H23)
伊藤　亜矢子（ITO AYAKO）　　(H23)
お茶の水女子大学・生活科学部・准教授
上條　晴夫（KAMIJO HARUO）
東北福祉大学･子ども科学部･准教授(H23)
齋藤　眞宏（SAITO MASAHIRO）
旭川大学・経済学部・准教授　(H23)
福島　博敏（FUKUSHIMA　HIROTOSHI）
弘前大学・教育学部・准教授　　(H23)
村井 尚子(MURAI　NAOKO)　　(H23)
大阪樟蔭女子大学・人間科学部・准教授